

# T. S. エリオットと性病

——『荒地』草稿における「水頭症の幼な子」をめぐって——

森 田 由 香

## T. S. Eliot and Venereal Disease

——An Essay on “The infant hydrocephalous” in *A Facsimile of The Waste Land*——

MORITA Yorika

T. S. エリオットの初期の詩の中には、結核、癲癇（てんかん）、性病、皮膚病、パセドー病といった病気や、精神薄弱、精神衰弱、ヒステリー発作といった精神的トラブル、殺人やレイプのような犯罪が、あちらこちらに顔をのぞかせている。「ヴォルピネ王女は、やせた、青い爪の、／肺病病みの手を伸ばす」，「ベッドの上のてんかん病みの女が／のけぞって、両わきをつかむ。」，「癱（よう）のある若い男がやってくる」などである。<sup>1</sup> しかしこれらの病む人々の描写のなかでも、『荒地』の草稿に登場する「水頭症の幼な子」はとりわけ痛ましい：

The infant hydrocephalous, who sat	水頭症の幼な子が、
By/At a bridge end, by a dried-up water	水の干上がった、橋のたもとに座っていた <sup>2</sup>
course	

水頭症という病気をよく知らなくても、この幼な子がなにか深刻な病を患っていること、そしてそれは生まれつきのもののような感じがすること、さらに橋のたもとにおすわりをしているのは捨て置かれたのではないかということが想像されるだろう。この子は何者なのだろうか。本論では、優生学とエリオットの関わりのなかでも、特に若きエリオットが進路を決めかねてフランス、イギリス、アメリカを行き来した時期を中心に、当時、社会の大きな関心事であった性病という問題との関わりをふまえ、この子が登場する背景を考えたい。

まず初期の作品になんども見られる、夜の通りを売春宿をもとめて歩き回る主人公の姿を足がかりにしよう。すると「プルフロックの恋歌」の冒頭部分が思い浮かぶが、死後出版された『3月うさぎの思いつき』の中の「プルフロックの寝ずの夜」（1911）という詩の中にも

同様の場面がある。<sup>3</sup> ここで「僕」は、夕暮れ時の裏通りを歩き回り売春宿のそばまでやってきて、コルセットから胸をはみ出させた女性に出会い (“Women, spilling out of corsets”), いかかわしいささやき声をたてられる (“Pointed a ribald finger at me in the darkness/ Whispering all together, chuckled at me in the darkness.”)。

また、「風の夜のラブソディ」(1911)でも、夜中の12時から町を歩き回る主人公が売春婦風の女性に出会う。

You see the border of her dress	ドレスの裾が破けて
Is torn and stained with sand,	砂で汚れているのが見えるだろう。
And you see the corner of her eye	それに目尻が
Twists like a crooked pin.”	歪んだピンのようにねじれている。

エリオットの友人コンラッド・エイケンがこの箇所を例にあげて「彼独特の」観察だと述べているが、<sup>4</sup> 確かにエリオットに特徴的な意地の悪さを感じられる。この女性は官能的で退廃的な売春婦の雰囲気よりもむしろ、奇妙に常軌を逸した空気を持っている。crookedなのは、ピンや目尻ではなく、彼女の心のどこかのようにも思える。この2つの詩はともに1911年に書かれているが、登場人物の「僕」は町を歩き回るだけで、売春宿に入る事はない。

その理由は、エリオット自身のペルソナだと言われるこれらの主人公の優柔不断さ、強すぎる自意識やプライドだと思われるが、同じ1911年に書かれた短い詩の中では、彼を踏みとどまらせる理由がほかにもあることが暗示される（下線は筆者）：

He said: this universe is very clever	彼は言った：この宇宙はとても賢いと
The scientists have laid it out on paper	科学者たちは紙の上に宇宙を並べ
Each atom goes on working out its law,	個々の原子は規則どおりに動き続け、決して
and never	
Can cut an unintentioned caper.	意図なく跳ね回ることはありえない。
He said : it is a geometric net	彼は言った：この宇宙は幾何学模様の網だと
And in the middle, like a <u>syphilitic</u>	そしてその真ん中に梅毒の蜘蛛のように
<u>spider</u>	
The Absolute sits waiting, till we get	絶対者が居座って待っている 僕らが
All tangled up and end ourselves	すっかりからめとられて女の中で
inside her.	命を落とすまで。 <sup>5</sup>

2連8行からなるこの詩（無題）のなかで、無数の原子からなる宇宙の中心に鎮座する「絶対者」はなぜか「梅毒蜘蛛」にたとえられ、その蜘蛛は宇宙に幾何学模様の網を張り、マザーグースの「蠅と蜘蛛」を思わせるイメージで「僕ら」をおびきよせようとしている。最後にその蜘蛛が女性（her）であることがわかる。「僕ら」が彼女の誘惑にのり蜘蛛の糸に足を絡

めとられてしまうと、その先には梅毒による死が待っているという構図だ。「僕ら」は生と死、欲望と恐怖の間に立ちつくす。

エリオットの主人公は売春宿の前でいつも逡巡しているかというところでもない。果敢に店に足を踏み入れる者もある。『荒地』の草稿の冒頭まるまる54行はエズラ・パウンドによってあっさり削除された部分だが、ここには仲間たちと騒いだ後「マートルの売春宿」に繰り出す若者が登場する。しかし女将のマートルは、自分の店は上品な店なのだからと主人公の入店に難色を示し、20年間「清潔を守ってきた」から紳士方の評判を勝ち得てきたと自慢する：

And the reputation the place gets, off of a few bar-flies,  
I've kept a clean house for twenty years, she says,  
And the gents from the Buckingham Club know they're safe here;

うちの店は評判があるのよ、大酒飲みが少ないから、  
二十年店をきれいに保ってきたんだと、彼女は言う、  
だからバッキンガムクラブからきた紳士たちが安心して過ごせるんだ。<sup>6</sup>

ここでいう「清潔」(clean)が、掃除をしてきたということではないのは明らかで、マートルの抱える売春婦たちが性病にかからないようにしてきた（あるいは感染した売春婦は解雇して）きたということを意味するだろう。マートル(Myrtle 銀梅花)は古くはヴィーナスの神木とされるが、性病のことを「ヴィーナスの呪い／病」という言い回しがあることも無関係ではないかもしれない。

つまり、この若者は衛生面で評判の高い店を特に選んでいるわけだが、それでも彼が手に入れたのは結局、「寝床と風呂とハムエッグ」だけである（“she gave me a bed, and a bath, and ham and eggs”）。一方、『荒地』の草稿のもう少しあとの方にはcleanであることにあまり気を使っていないブラウン女将の安宿（Marm Brown's joint）が登場する。ここの常連の船乗りたちが性病に感染しているのは珍しいことではないようだ。（“Staggering, or limping with a comic gonorrhea,” “Two men came down with gleet; one cut his hand.”）<sup>7</sup>。

性病と売春婦との連想は珍しいものではないが、エリオットの作品でもこの組み合わせはいくつか見られる。例えば『荒地』第3章「火の説法」のポーター夫人とスウィーニーの場面を見てみよう。プルフロックの正反対のキャラクターとされるスウィーニーがポーター夫人のもとにあらわれると、夫人と娘が足を洗っていたという場面である。ダイアナの水浴びを見てしまったアクタイオンの神話や聖杯伝説における神殿に入る前の洗足の儀式が下敷きになっているが、それらを冒瀆するかのようポーター夫人は売春宿の女将だ。彼女はオーストラリア軍の間では悪名が高かったようで、エリオットは彼女にまつわるバラッドをオー

ストラリアからの話で知ったと『荒地』の注に自ら記している。多くのオーストラリア兵がこの宿で梅毒に感染して問題になったとされる。B. C. サザムが挙げているポーター夫人のバラッドを並べてみよう（下線は筆者）：

『荒地』（ll. 196 - 202）

But at my back from time to time I hear	でも時々僕の後ろから警笛や
The sound of horns and motors,	エンジンの音が聞こえる、それが春になると
which shall bring	
Sweeney to Mrs. Porter in the spring.	スウィーニーをポーター夫人のもとへ連れてくる。
O the moon shone bright on Mrs. Porter	ああ 月はポーター夫人とその娘を
And on her daughter	明るく照らした
They wash their feet in soda water	二人はソーダ水で足を洗う

サザムの挙げたバラッド<sup>8</sup>

O the moon shines bright on Mrs Porter	おお、月は照る照るポーターさんと
And on the daughter of Mrs Porter.	ポーターさんの娘の上に。
And they both wash their feet in soda water	そして二人はどうしても
And so they oughter	足をソーダ水できれいに
To keep them <u>clean</u> .	洗っておかねばならぬ。

ポーター夫人の娘というのは実の娘というよりも、ポーター夫人のところで働いていた女性の一人だろう。前述のマートル女将の言葉と同じコンテキストで使われているcleanに注目したい。ソーダで足を洗い清潔に保つというのは、娼婦たちが性病予防のためにからだの消毒にソーダ水を使っていたということの比喩的表現だと思われる。<sup>9</sup>

これらを考えると、エリオットの詩の主人公たち、特にエリオット自身の投影であると思われるプルフロック型の主人公たちが、夜中の町をうろうろ歩き回るものの、ついには目的を達することのできない理由は、過剰な自意識や羞恥心ばかりではなく、性病感染への警戒があったからだと考えてもいいと思う。スウィーニーや船乗りといった反プルフロック型の登場人物たちが性病にかかる危険をものとしないと対照的だ。

エリオットは性病に関するこのような警戒心をどこで身につけたのだろうか。ここでエリオットの伝記的なことがらと売春と性病を巡る状況を見ておこう。エリオットはハーバード大学卒業後の1910年から1911年の1年間、母の反対を押し切ってパリに留学する。エリオット自身が晩年「ロマンティックな一年」<sup>10</sup>と呼んだパリ滞在である。ここでエリオットは詩集で献辞を捧げることになる親友ジャン・ベルドナルに出会い、右翼思想家シャルル・モラスの古典主義思想に影響を受け、「文学においては古典主義者、政治では王党派、宗教ではアングロカトリック」<sup>11</sup>という有名な宣言をのちにすることになる。そして同時に、当時のパリはちょうど梅毒撲滅のキャンペーンのまっただ中であつた。

クロード・ケテルの『梅毒の社会史』などによると、近代梅毒学の創始者と言われるフランス人医師アルフレッド・フルニエによって、梅毒はフランスで1880年代から社会問題として浮上することになった。<sup>12</sup> 1899年と1902年には性病の予防に関する国際会議が開かれ、イギリス、ドイツ、アメリカなど欧米の医師たちが参加する中、フルニエは梅毒予防の強い必要性を訴えている。1880年から第一次大戦開戦前までに特にフランスでは梅毒撲滅の執拗なキャンペーンが繰り返されたという。<sup>13</sup> キャンペーンで非難されたのは梅毒の感染源とされる売春婦だった。男性たち、とくに若者、そして兵士たちに、不道德な性交渉の危険性が繰り返された。男性用の公衆トイレにポスターが張られ、ソルボンヌ大学でも性病についての講義がおこなわれたと歴史家は言う。<sup>14</sup> また、先天性梅毒児への関心が高まると、「ほとんどすべての奇形や身体の障害が梅毒のせいにされ」<sup>15</sup> 梅毒の脅威にさらされるのは個人ではなく人種の未来だという認識が浸透してゆく。イギリスの高名な梅毒医ジョナサン・ハチントンがジストロフィーの原因が梅毒であると主張しようとしたことや、結核菌を発見した本人であるコッホが結核が梅毒起源のものであると信じていたということをアラン・コルバンは挙げているが、あらゆる病気の原因として当時梅毒がいかに強力に医師たちの想像力を支配していたかを示す例と言えるだろう。<sup>16</sup>

エレーン・ショウォルターが、世紀末を象徴する病気は確かに梅毒であった言っているように、<sup>17</sup> 世紀転換期の欧米は治療法もまだないこの性感染症の蔓延におびえていた。梅毒の原因が寄生虫なのかウィルスなのか遺伝なのかすら特定できず、治療法は効き目のない水銀とヨウ化カリウムが主だった。その正体が解明され(梅毒スピロヘータの発見は1905年)、ワッセルマン血液検査の発見により不安定ながら診断が科学的にできるようになり(1906年)、比較的効果のある治療薬サルヴァルサンが作られ(1909年)たが、1928年に発明されたペニシリンが梅毒治療に一般的に導入されるようになるには1940年代を待つ必要があったのである。

米・英・仏各国の梅毒をめぐる状況を簡単に見ておこう。まず、フランス留学前のエリオットが娼婦や梅毒に関して全く無知であったということはないだろう。漠然とした知識はあったはずだ。彼がハーバード時代に読んでいたボードレールらの作品の中にも娼婦や梅毒が登場する。しかしそれはエリオットにとっては文学の装置としてであり、現実的な問題ではなかったと思われる。

アラン・M・プラントは、アメリカの性病の社会史『特效薬はない』の中で、当時の新聞や雑誌に寄せられた読者の手紙をいくつか挙げている。ちょうどエリオットがパリから帰国したころの1912年に『フォーラム誌』に寄せられた読者の手紙には、まったく心当たりなく梅毒に感染していると診断され驚愕した女性の言葉がつづられている：

わたくしはこの病気については新聞の「売薬」の広告でしか知りませんでした。罪の結果であり、裏の社会にしか関わりのないものだとして理解していたのです。きっと友人が診断を間違えたのだと感じました。彼が「水飲み場のコップからまた悲劇が！」と叫んだ

時、わたくしは水飲み場のコップは使っていないとはっきり反論いたしました…<sup>18</sup>

この手紙から、まずフォーラムに投稿する中流以上の女性が目にするような雑誌や新聞に梅毒薬の広告が載せられていたということ、そして、当時はコップを共有したり水飲み場でくちをつけることで梅毒に感染すると考えられていたらしいことがわかる。当時の梅毒をめぐるアメリカの状況はいわゆる「沈黙の陰謀」が支配していた。性病、特に、梅毒は、知っていて口にださないタブーというよりも、医学関係者以外にはほとんど正確な情報がしられることのないことであり、感染していても患者にすら知らされないことも少なくなかった。1913年以前には女性や若い人たちに対する性病教育はほとんどなされていなかったようだ。

1913年はフランスの劇『梅毒病み』がニューヨークで上演・出版された年であり、これはその後のアメリカ国民の梅毒予防に関する意識を大きく変えたとされる芝居である。この際序文をつけたバーナード・ショーは、梅毒のことを「人類の最も恐るべき災いの一つとして知られる病気で、最悪の場合、外見が忌まわしく損なわれ、破滅的な遺伝を引き起こしうる」と書くのみで、ついに一度も「梅毒」という言葉を使用していない。<sup>19</sup> ニューヨーク・タイムズ紙も同様に、梅毒 (syphilis) という語のかわりに「まれな血液の病気」“rare blood disease”と婉曲表現を使っている。<sup>20</sup> アメリカ社会はsyphilisの語の使用を好まず、第一次大戦から第二次大戦にかけて激化する軍人に対しての反性病教育でも、病名ではなくVD (性病 venereal disease) が使われた。エリオットは1915年の手紙で、イギリスで出会った女性の名前が「とても面白い (amusing)」と書いているが、その名前の一つは「フィリス Phyllis」だとしている。<sup>21</sup> Phyllis はヴェルギリウスやホラティウスの牧歌に出てくる娘の名前だが、それを面白いと思ったのは syphilis に音が似ているのでアメリカでは考えられない名前からではないだろうか。話を前に戻すと、1917年の段階でさえ、アメリカの代表的な性病医であるジョン H. ストークスは、著書『第三の大疫病』で、この病に対して世間の知識が曖昧である事、沈黙していることや無知であること、知ろうとしないことを案じている：

第三の大疫病とは梅毒である。この病気は、人々が啓蒙された今日にあっても、依然として曖昧さに包まれ、沈黙の柵に囲まれ、我々自身の無知と偽りの羞恥によってその実際の破壊力の千倍にも武装されている。

そして「梅毒について知ることは清潔な (clean) 生活や思考となんら相容れないものではない」と読者に呼びかける必要があったのである。<sup>22</sup>

1910年のアメリカからエリオットが降り立ったフランスは、文学においても梅毒花盛りであった。19世紀文学には「梅毒が、いつでもどこでも、だれにでもまわりついていた」<sup>23</sup>と言われるように、ボードレール、フローベール、モーパッサンなどすぐに名前が挙がるが、20世紀に入ると反梅毒をテーマにしているかのような作品が発表されている。前述の『梅毒病

み』はおおいに成功したがこれ以外にも梅毒のテーマは小説や芝居で取り上げられ、売春婦から感染した梅毒患者である夫との間に生まれた子供に障害があり嘆く母親や、売春婦と関係して梅毒をうつされ自殺する若者などが次々と描かれた。<sup>24</sup> ガストン・ルルーの『オペラ座の怪人』(1910)の鼻のない顔はまさに梅毒におかされた異形の典型だと考えられる。一方、英米ではドリアン・グレイや『日陰者ジュード』のリトル・ファータータイムなどがあるものの、どちらかというとも梅毒はフェミニズム作家からの告発といった性格の小説で多く扱われている。<sup>25</sup> サラ・グランズの『双子座』(1893)やM. M. ダウイの『ガリア』(1895)、シャーロット・ギルマンの『南十字星』(1911)など、「フェミニストにおなじみの」テーマになってゆくようだ。<sup>26</sup> その後大戦間に梅毒は、特にアメリカでさらに大きな社会的関心事となる。例えばエラリー・クイーンのみステリー『Yの悲劇』(1932)は、梅毒に侵された一家の惨劇を描き大衆の梅毒に対する恐怖をあおったが、1932年の時点でも梅毒は遺伝するとされているばかりか、先天性梅毒で生まれた盲目聾啞のルイザがワッセルマン反応陰性となっているなど、一般社会における梅毒の知識はまだまだ混乱している印象だ。<sup>27</sup> フォークナーの『サンクチュアリ』(1931)では、先天性梅毒と思われる残忍なポパイは、「小柄で」(つまり成長不全)「あごは引っ込んでないも同然」,「火のそばに置き忘れた蠟人形」のような容貌だとされる。<sup>28</sup>

ここで、エリオットがパリ留学中という「多感な時期に読んだ」作品で、「当時のパリのシンボルだった」と回想しているシャルル・ルイ・フィリップの『モンパルナスのビュビュ』(1901)を見てみよう。<sup>29</sup> ボードレール、ラフォルクなどとともに若きエリオットが影響を受けたとされるフィリップだが、舞台設定や言葉の雰囲気にも共通性があるされることが多い。前述の「風の夜のラブソディー」や「前奏曲」III, IVとの関連がよく指摘される。しかし『モンパルナスのビュビュ』は、作者フィリップ自身の体験をもとに書かれたもので、売春婦ベルトが梅毒に感染して病気が進んでゆくという物語であることはほとんど触れられることがない。アメリカ生まれでのもフランスに渡った作家ジュリアン・グリーンは、「私の姉は…『モンパルナスのビュビュ』を読むときはいつも手袋をすと言ってきかなかった」と回想しているが、その文脈である。<sup>30</sup>

エリオットがその「リアリズム」を賞賛したこの小説の中には、症状が進行する具合や、それを取り巻く人々の心情の変化、そして感染が描かれる。ベルトに真剣に恋をするビュールは、「ブローカ病院」という病院名からベルトの病気が具体的には何であるかを知るが、彼には「梅毒を正視する精神的な用意がなく」「梅毒は恥や悪のように言われているのを知っているだけ」だった。ベルトの収入で遊び暮らすビュビュはベルトの感染し知り、子どもの頃に梅毒で亡くなった隣人のことを思い出し恐怖におののく。その隣人は22歳で「完全に腐って」、「肥やしのようになって死んだ。」ビュビュはそれに自らを重ね、「赤い膿んだ腫れ物」ができた自分が病院のベッドに横たわり、完全に腐っている姿を思い浮かべる。そしてその後、二人ともがベルトによって感染していたことがわかる。<sup>31</sup>

イギリスでは、1886年に接触伝染病法が廃止された以後はほぼ「自由放任」の状態が続いていた。<sup>32</sup>しかし第一次大戦前の1913年になってようやく変化が訪れる。1913年7月22日号の「モーニングポスト」紙に著名な医師38人の連盟で梅毒対策に対する医学宣言がなされ、それが国会議員に配られた。8月にはロンドンで国際医学会議が開かれ、梅毒の「地域社会への危険と公的防止の問題」が論じられる。これをきっかけとして、政府もようやく重い腰を上げ、王立性病調査委員会が設立され、ほぼ初めての全国的な実態調査が4年をかけて行われることになったのである。<sup>33</sup> エリオットが、フランスへ留学し、アメリカに戻って大学院へ進学し、イギリスにわたって永住することになる頃の梅毒を巡る状況は以上のようなものであった。

エリオットの詩へ話を戻そう。エリオットの梅毒への言及は、ボロ王(King Bolo)シリーズと呼ばれる仲間内のみで回覧した猥褻な一群の詩の中で、特にあからさまである。コロンプス、イザベラ女王やカリブと思われる島の住人たちが登場し、性病を患っている様子がふざけたタッチながら冷めた様子で描かれる。<sup>34</sup>『荒地』の中で見ると、前述のポーター夫人以外にも梅毒への言及と思われる例は見られる。タイピストのボーイフレンドである「the young man, carbuncular」(l. 231)のカルブンケルとは、辞典などによると癰(よう)という苦痛を伴う炎症で化膿して崩れた後腫のように広がるとあり、決して軽いニキビではないようだ。むしろ、ビュビュが思い浮かべて恐怖した「赤い膿んだ腫れ物」のような、梅毒の特徴的な症状である皮膚疾患を思わせる。「エリオット氏の朝の礼拝」(1918)に登場する膿疱性の皮膚病(pustular)をわずらって救いを求めている若者たちも同様だ。("The young red and pustular/ Clutching piaculative pence." ll. 19-20)。「改悛の通り」(l. 18)を進む彼らが、その皮膚に残しているスティグマだと見るべきだろう。

またこれらの観点から『荒地』第2章「チェスの試合」のリルを見てみると、また違った側面が見えてくる。優生学的に見ると、リルは、当時の典型的な労働者階級の多産の女性だ。避妊の知識もあまりなく、度重なる妊娠と育児と貧困で、またあるいは非合法の堕胎薬のせいで、疲れ果てて、歯がわるくなり、実年齢の31歳とは思えないほどに老けている。しかし、歯へのダメージはとくに梅毒患者に特徴的なものであると一般に考えられ、小説や医学書などでも繰り返されていたことを考えると、リルの歯が悪いのは妊娠や生活苦以外の原因もあるのではないだろうか。<sup>35</sup> 夫のアルは軍人と思われるが、梅毒撲滅キャンペーンが注意を真っ先に注意を促したのが軍人であった。結核や神経衰弱も梅毒が原因とされることがあったという点を考えると、ヴォルピネ姫やチェスをする女とのつながりも考えられる。

冒頭にあげた「水頭症の幼な子」は、この文脈で考えるととらえやすいだろう。水頭症(hydrocephalus)という病気は、英語ではwater on the brain ともいい、一般にあまり知られていない病気だ。本来体内に流れてゆくべき体液が頭蓋の内側にたまる病気で、子供の場合頭の骨が柔らかいために、たまった水に押されて骨が膨張し頭が非常に大きくなるという。知能の発達に障害が残ることが多く、かつてはほとんど治療法がなかったとされる。世



紀末からペニシリン治療開始まであたりの英米の梅毒関連の医学書には、先天性の梅毒の子どもにみられる症状の一つとして水頭症が挙げているのが見当たる。

梅毒治療の最先端国フランスの医師アルフレッド・フルニエのもとへは、イギリスやアメリカから医師たちが梅毒治療の勉強に集まったようだ。その中の一人、アメリカ人医師プリンス・モローはフルニエの『梅毒と結婚』を1880年に英訳しているが、その中で次のように述べている。

フルニエはこれらの子供たちの[梅毒の]素因として、山ほどの先天性異常に加えて、髄膜炎、重度の精神遅滞、そして水頭症を挙げた。<sup>36</sup>

当時のイギリスの最も高名な医師一人であり、フルニエの友人であったジョナサン・ハチンソンもフランスやオーストラリアでも出版された『梅毒』で、子どもの梅毒の診断材料の一つとして頭蓋骨の変形を指摘する際に、その変形の原因のひとつに水頭症を挙げている。まだ批判の多かった時代に避妊のパンフレットを書いたことでも知られる H. A. オルバット医師は、著書『病氣と結婚』で「先天性梅毒の子どもは水頭症（water on the brain）にかかりやすいようだ。ある男性が梅毒にかかっている間に結婚し、三人の子どもたちはこの病氣をもって生まれてきた。」と記している。<sup>37</sup> 前述の『梅毒病み』に、「自分では支えきれないほど大きな頭を載せた小さな肉体」という先天性梅毒児の描写がある。<sup>38</sup> ゾラの『パスカル博士』（1893）では神経症の遺伝から子どもが水頭症で亡くなる場面があるし、今はほとんど知られていないジャック・テルニの『沈黙を強いられた人々』（1909）にも神経症の遺伝で水頭症の子どもが生まれる。<sup>39</sup>

エリオットが「水頭症」という病名をどこで知ったかは今となってはわからない。しかしあまり一般的ではないこの病氣がエリオットの記憶に残り、それが乳幼児を結びついているということを、これまでの考察をふまえてとらえるなら、梅毒児の描写と関連があるかもしれないと考えるのは、それほど方向違いでもないだろう。若いころのエリオットは多くの雑誌に書評や論評を書いて生活を支えていた。なかでも「倫理学国際ジャーナル」誌の仕事は「気に入っていたし、かなりまじめに受け取っていた」と伝記作家は伝える。<sup>40</sup> 例えば、1917年29号の「倫理学国際ジャーナル」誌は「王立性病委員会報告書」という記事を載せている。<sup>41</sup> 前述の「モーニングポスト」紙での宣言等に促されて、イギリス初の大規模な性病調査が行われたが、その結果についての記事である。フランスにやや遅れて性病、特に梅毒への関心が国家レベルで高まったことがわかる例だ。医学会も変化を強いられたようで、「英国皮膚科ジャーナル（*The British Journal of Dermatology*）」誌は1917年（29号）から「英国皮膚科・梅毒ジャーナル」（*The British Journal of Dermatology and Syphilis*）誌に名前が変更されているし、同年に「アメリカ梅毒ジャーナル」（*American Journal of Syphilis*）誌は創刊されている。

「王立性病委員会報告書」はエリオットが書いたものではないが、エリオットが自分の書いた記事以外にも目を通していたとすると、先天性梅毒児が「盲目、耳が聞こえない、『くる病』、精神薄弱、あるいは生存競争に適さない諸症状」という問題を抱える可能性が高いことを知っただろう。この報告書で、先天性梅毒児に見られる盲目で耳が聞こえないという症状は何度か繰り返されているが、『荒地』の草稿にでてくるこの水頭症の幼な子は、自分の触る弦が見えているのだろうか、そして自分がつまびく弦の音が聞こえているのだろうか。

この子の両親はどうしたのか気になる。母親らしき人物が登場している直前の箇所をファクシミリ版から引用してみよう：

A woman drew her long black hair out tight	ひとりの女が長い黒髪をぴんと引っ張り
And fiddled whisper music on those strings	それを弦にしてささやくような調べを奏でた
And bats with baby faces, in the violet air light,	そしてすみれ色の光の中で赤ん坊の顔をした こうもりが
Whistled, and beat their wings	口笛を吹き、羽をばたつかせ
A <del>man</del> form crawled downward down a blackened wall	暗い壁を逆さになって這い降りて
And upside down in air were towers	塔が逆さに浮かんで見えた
Tolling reminiscent bells, that kept the hours.	追憶を誘う鐘の音 それが時を刻んだ。
And voices singing out of empty cisterns and exhausted wells.	そして空っぽの貯水池と干上がった井戸からの 歌声。
The infant hydrocephalous, who sat	水頭症の幼児、
By/At a bridge end, by a dried-up water course	干上がった水路の脇の橋のたもとに座って
And fiddled (with a knot tied in one string)	(一本の弦にできた結び目を) つまびいた <sup>42</sup>

水頭症の幼な子同様、この女性も尋常ではない。自らの黒髪を弦の代わりにして音楽を奏でる姿は狂気をあらわすのか。しかし彼女のお供のコウモリたちが『ドラキュラ』の場面を暗示する様子で下降してゆくところを見ると、彼女は狂気どころか人間ですらなく、吸血鬼だとほのめかされているようだ。そしてそのコウモリの顔が赤ん坊の顔をしているのである。

ここにサンダー・ギルマンが20世紀初めの梅毒のイコノグラフィーの例として挙げている“La Syphilis”というタイトルのポスター（1916）を並べてみよう。



ギルマンはこの「蜘蛛のような髪の毛の女」について次のように指摘する：

墓石の間に立ち、黒衣をまとい、自らの性器をあらわす髑髏をもつ女は、典型的な「運命の女」である。しかしこのイメージには注目すべき世紀末の脚色が加えられている—「梅毒」はメデューサなのだ。女の巻きひげのように広がる髪やじっと見つめる眼は、絵を見る人に男性が誘惑される理由を示している。男は性的欲望ではなく彼の理性を失わせる吸血鬼のような魔力に誘惑されるのである。<sup>43</sup>

エリオットの詩行の女性を見ると、そのメデューサを思わせる髪の毛は黒く、それをつまびいて奏でられるのはセイレーンの歌声のような誘惑の調べ、そして吸血鬼を連想させるコウモリ、とギルマンの図式を満たしている。そしてギルマンのいう典型的な「20世紀の梅毒のイコノグラフィー」を完成させるのが、次に登場する「水頭症の幼な子」である。

リルが墮胎した胎児、コウモリの顔にはめ込まれた赤ん坊に次いで『荒地』に登場する3つめの赤ん坊の姿だ。赤ん坊に対する作者エリオットの態度には残酷な嫌悪感が感じられる。赤ん坊に恨みでもあるのだろうか。あるのだろうか。性と生殖にただならぬ恨みが。この子をポーター夫人とスウィーニーの子どもだと推測している批評家もある。<sup>44</sup> 犯罪も平気でおかす動物のようなスウィーニーと売春婦の間のこどもに、先天的な障害があたえられているのは、当時の優勢学的風潮からいっても当然だということだろう。スウィーニーの「膝を広げ／両腕をたらす」姿は、猿にせよアイルランド人にせよ、退化全般をあらわしているとも読

めるが、梅毒のコンテキストで読むと、スピロヘータによって背骨が浸食され前屈みになっている姿と見ることもできるだろう。

しかし、この母親とおぼしき女性が髪によって特徴を与えられている点は、『荒地』第2章「チェス遊び」の「炉の明かりのもとで、ブラシの下で、髪が／炎の先端となって広がる」女性 (ll. 108-109) や「髪も結わずに／町を歩こう」 (l. 133) と口にする女性を思わせ、その姿はエリオットの宿命の妻であり、病む女性であったヴィヴィアンと重なる。退化という観念にとらわれた19世紀後半の社会が、「神経症患者の集団」によって妄想を助長させたのに対し、世紀転換期以降になると「人々の注意を引きつけることになるのは梅毒患者の集団」になった、とコルバンは言う。<sup>45</sup> エリオットが成長し、青春をすごし、後に悲劇的な結果を迎えることになる結婚生活を送っていた時期、社会の脅威の対象は微妙に変わりつつあった。その焦点が、精神異常・精神薄弱の遺伝から、梅毒の感染／遺伝へと移っていったのである。

クリスティナ・ハウクは「墮胎と個人の才能」のなかで、生殖の失敗が『荒地』のテーマだという読みはオリジナルなものではないが、これまでは不毛性を文化、精神、歴史の失敗という比喻としてとらえがちであったとした上で、『荒地』は子ども殺しを含む墮胎がテーマであると主張し、できてほしくない子ども、生まれてほしくない子どもを作品で抹殺していると言う。<sup>46</sup> 彼女の説には賛成できない点がままあるものの、エリオットの作品の中で健康な子どもたちが生まれて育つことはないという点を、文化、精神、歴史の不毛性の比喻だとしてきたエリオット批評に限界があるのは確かだ。エリオットが『荒地』について次のように言う時、彼は世代の幻滅を書いたのではなく、エリオット自身の絶望を書いたと言いたかったのではないだろうか：

わたしは「世代」という言葉が嫌いだ。『荒地』という詩を書いた時、好意的な批評家の中に、わたしが「ある世代の幻滅」を表現したのだと言った人が何人かいたが、これはナンセンスだ。確かにそういう人たちの幻滅しているんだという幻想を表現してやったことになったかもしれないが、私にはそんな意図は全くなかった。<sup>47</sup>

## 注

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *The Complete Poems and Plays* (London: Faber & Faber, 1969) 40, 43, 68. 以下、この詩集からの引用で本文中に詩のタイトルを挙げた場合はページは記さない。また、これらの優生学的考察については Juan Leon, “‘Meeting Mr. Eugenides’: T. S. Eliot and Eugenic Anxiety,” *Yeats Eliot Review* 9.4 (Summer/Fall 1988) 169-177; Donald J. Childs, *Modernism and Eugenics: Woolf, Eliot, Yeats, and the Culture of Degeneration* (Cambridge: Cambridge U. P., 2001).

<sup>2</sup> T. S. Eliot, *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations of Ezra Pound*, ed. Valerie Eliot (London: Faber & Faber, 1971) 75. 以下 A Facsimile と略し、エリオットが線で訂正したり消したりした箇所は日本語訳には反映させていない。またタイトルや本文中の「『荒地』の草稿」, 「ファクシミリ版」とは本書をさす。

- <sup>3</sup> T. S. Eliot, *The Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917*, ed. Christopher Ricks (London: Harcourt Brace, 1996) 43-44. 以下 *Inventions* と記す。
- <sup>4</sup> Conrad Aiken, "Anatomy of Melancholy" *T. S. Eliot: The Waste Land*, ed. C. B. Cox and Arnold P. Hinchliffe (London: Macmillan, 1968) 91.
- <sup>5</sup> *Inventions* 71.
- <sup>6</sup> *A Facsimile* 5.
- <sup>7</sup> *A Facsimile* 55-59.
- <sup>8</sup> B. C. Southam, *A Guide to The Selected Poems of T. S. Eliot*, 6th. ed. (London: A Harvest Original, 1994) 168. Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays* (Chicago: The University of Chicago Press, 1956) 86 には別のバージョンが挙げている。
- <sup>9</sup> アラン・コルバン 『時間・欲望・恐怖：歴史学と感覚の人類学』 小倉孝誠訳 (東京：藤原書店, 1993) 131-132.
- <sup>10</sup> T. S. Eliot, "A Commentary," *The Criterion* 13 (April 1934) 452.
- <sup>11</sup> T. S. Eliot, *For Lancelot Andrews: Essays on Style and Order* (New York: Doubleday, Doran and Company, 1929) vii.
- <sup>12</sup> 梅毒をめぐる全般と、フランスの事情については Claude Quétel, *The History of Syphilis*, trans. Judith Braddock and Brian Pile (Baltimore: The Johns Hopkins U. P., 1990) ; アラン・コルバン 『娼婦』, 杉村和子監訳 (東京：藤原書店, 1991) 132 を中心に参照した。
- <sup>13</sup> コルバン 『時間・欲望・恐怖』 153。
- <sup>14</sup> Quétel 186; コルバン 『娼婦』 372。
- <sup>15</sup> コルバン 『娼婦』 363。
- <sup>16</sup> コルバン 『時間・欲望・恐怖』 158。
- <sup>17</sup> Elaine Showalter, "Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle," in *Sex, Politics, and Science in the Nineteenth Century Novel*, ed. Ruth Bernard Yeazell (Baltimore and London: The Johns Hopkins U. P., 1986) 88.
- <sup>18</sup> "What One Woman Has Had to Bear," *Forum* 48 (October, 1912) , quoted in Allan Brandt, *No Magic Bullet: A Social History of Venereal Disease in the United States since 1880* (New York & Oxford: Oxford U. P., 1985) 21.
- <sup>19</sup> George Barnard Shaw, "Preface" Eugene Brieux, *Damaged Goods*, trans. John Pollick (New York: Brenantos, 1912) 5 [*Les Avariés*, Paris, 1901]
- <sup>20</sup> *New York Times*, April 6, 1913. quoted in Brandt 48.
- <sup>21</sup> T. S. Eliot, *The Letters of T. S. Eliot Volume 1 1898-1922*, ed. Valerie Eliot (London: Faber & Faber, 1988) 97.
- <sup>22</sup> John H. Stokes, *The Third Plague: A Discussion of Syphilis of Everyday People* (1917; Philadelphia and London: W. S. Saunders Company, 1920) 7, 20.
- <sup>23</sup> 寺田光徳 『梅毒の文化史』 (東京：平凡社, 1999) 7.
- <sup>24</sup> Michel Corday, *Vénus* (1901) , André Couvreur, *Les Mancenilles* (1900) など。Quétel 146, コルバン 『娼婦』 375.
- <sup>25</sup> 森田由香 「僕たちは多すぎた：リトル・ファーマータイム再考」 那須雅吾監修 『「ジュード」についての11章』 (東京：英宝社, 2003) 55-77.
- <sup>26</sup> Brandt 18; Elaine Showalter, *A Literature of Their Own* (Princeton U. P., 1977) 200. Emma Liggins, "Writing against the 'Husband-Fiend': Syphilis and Male Sexual Vice in the New Woman Novel," *Woman's Writing*

- (7:2) , 2000. 175-195.
- <sup>27</sup> [Ellery Queen], *The Tragedy of Y* (1932; New York: International Polygonics, 1986) .
- <sup>28</sup> William Faulkner, *Sanctuary* (1931; Harmondsworth : Penguin, 1975) . ポパイの優生学的な問題は富山太佳夫『ポパイの影に：漱石／フォークナー／文化史』（東京：みすず書房，1996），185-213 参照。
- <sup>29</sup> T. S. Eliot, “Preface” *Bubu of Montparnasse*, by Charles Louis-Philippe (1901; New York: Avalon Press, 1945) 9-14.
- <sup>30</sup> Julien Green, *Jeunesse* (Paris: Plon, 1974) quoted in Quétel 193.
- <sup>31</sup> Louis-Phillipe 90, 91, 70.
- <sup>32</sup> Roy Porter and Lesley Hall, *The Facts of Life: The Creation of Sexual Knowledge in Britain, 1650 - 1950* (New Haven and London: Yale U. P., 1995) 233; Mary Langan and Bill Schwarz ed., *Crises in the British State 1880 - 1930* (London: Hutchinson, 1985) 193. 梅毒を巡るイギリスの状況に関しては主にこの2冊を参考にした。
- <sup>33</sup> Roy Porter and Lesley Hall, 231; Mary Langan and Bill Schwarz, 197.
- <sup>34</sup> *Inventions* 309 - 321.
- <sup>35</sup> 梅毒の症状として，あるいは水銀治療の副作用として，歯が悪くなることについては随所に表記が見られるが，Brandt 12 を一例として挙げる。
- <sup>36</sup> Brandt 11, 14.
- <sup>37</sup> Jonathan Hutchinson, *Syphilis* (London, Paris, New York & Melbourne, 1904), 85; Henry Arthur Allbutt, *Disease and Marriage* (London, 1891) . 他に C. F. Marshall, *Syphilology and Venereal Disease* (London: Ballière, Tindal and Cox, 1906) 374 - 375; Leonard Findlay, *Syphilis in Childhood* (Oxford: Oxford U. P., 1919) 65 などともデータを挙げている。
- <sup>38</sup> Quétel 154.
- <sup>39</sup> エミール・ゾラ 『パルカル博士』 小田光雄訳（東京：論創社，2005）；ピエール・ダルモン『医者と殺人者』（東京：新評社，1992）233.
- <sup>40</sup> Peter Ackroyd, *T. S. Eliot* (1984; London: Cardinal, 1988) 69.
- <sup>41</sup> A. Maude Royden, “Report of the Royal Commission on Venereal Diseases,” *International Journal of Ethics* 27, 1917, 171-188.
- <sup>42</sup> *A Facsimile* 75
- <sup>43</sup> Sander L. Gilman, *Sexuality: An Illustrated History: Representing the Sexual in Medicine and Culture from the Middle Ages to the Age of AIDS* (New York: Wiley, 1989) , 308.
- <sup>44</sup> Leon 172; Childs 128.
- <sup>45</sup> コルバン 『時間・欲望・歴史』 145-146.
- <sup>46</sup> Christina Hauck, “Abortion and the Individual Talent” *ELH* 70.1 (2003), 237.
- <sup>47</sup> Eliot, *Thoughts After Lambeth* (London: Faber & Faber, 1931), 14.

（もりた よりか 本学非常勤講師・英語）